



俳優

# 篠山 輝信さん

今月のインタビューは、俳優の篠山輝信さんです。篠山さんは、来訪者向けに制作された当会の紹介ドラマでも、主人公の新人弁護士役で出演していただいております。当会とご縁の深い方です。NHKの「あさイチ」のリポーターもされるなど、マルチに活躍される篠山さんに、俳優になられた経緯、当会のドラマ撮影の思い出や法曹に対する印象などを伺いました。

聞き手・構成：雨宮 慶，西川 達也  
写真撮影：坂 仁根

——篠山さんは本当に多方面で活躍されていますが、ご自身のお仕事をご自身で表現されるとどうなりますか。

難しいですね。僕は俳優だって思ってるんです。でも実際にやってる仕事っていえば、タレント業とか情報番組のプレゼンターとか、そういう俳優業ではない方の分量が圧倒的に多いんです。僕は元々高校、大学と演劇をやったんで、舞台、演劇をもっとやりたくて芸能界に入って、一番は演劇をやりたいんだという気持ちがいささかもずれたことがないので、自分は何なんだって聞かれたら、やっぱり胸を張って「俳優です」って、ずっとそういう気持ちでいますね。

——学生時代は舞台を志向されていたのですか。

玉川高校時代に、英語劇部っていう、英語でミュージカルを上演する部活をやっていて、そこで舞台上がって演じることの魅力に目覚めたんです。

——英語で歌いながらセリフを言ったりするのですか。

そうです。大変なんですけど、訳もわからずやって

ましたよね。

中学ではサッカー部で、高校も1年の最初は、サッカー部に入ってたんです。でも演劇がちょっと面白そうに見えて、興味を持ってる男友達数人で行ってみたんです。そうすると、男女比が1対9くらいで、男子は競争率が低くていい役をもらえるんですよ。女の子は大勢いるから、一緒に入った女の子たちは役なんてもらえなくて、それこそ群衆みたいな感じなんです。でも演目には数が少ないけど男の役はあるじゃないですか。高校3年生の一番きれいな役をやる女の先輩と、1年生の経験もない男子が共演するんですよ。そうすると持ち前の目立ちたがり屋精神じゃないですけど、乗せられちゃって、何か楽しいなって思っていました。

高校3年生で進路をどうしようって思ってたときに、附属の玉川大学にちょうど芸術学部ができますよっていうことになって、これはお誘え向きだなと思って。それで芸術学部のパフォーマンス・アーツ学科で演劇のカリキュラムを選択しました。だから1期生で入ってそのまま演劇をずっと続けていたんです。

— ご自宅は学校から近かったのですか。

家は港区なので片道1時間半かけて通ってました。でも、通学時間が長いって楽しかったですね。小田急線の駅の手だけ寄り道の選択肢がある、今日ほどここで友達と降りようかみたいな感じです。

— 演劇の街、下北沢もありますからね。

僕、立ちたいんですよね、本多劇場とか。学生有的时候には本当によく見てたし、通ってましたから。

— そのころからプロを目指していたのですか。

高校のときは、演劇を勉強して単位が取れるのであればそこに進みたいというくらいで、すごく単純ですね。大学3年生くらいになるとこの先どうするかを考えますが、やっぱり演劇を続けたいと思ったんですよ。

本当に場当たりのなんです。演劇をやりたいから大学に入って、大学でもずっと演劇やってて、また卒業が近くなったから、続けられるんだったら続けたいよなと思って、そのまま事務所に所属したんです。ただ、もちろんそこは入った後の仕事でがんばんなきゃなと思ってました。

— 事務所に入って最初にされたお仕事は覚えていますか。

これもミュージカルだったんですよ。僕のやりたいことを社長とか事務所が酌んでくれて。だから一番最初もミュージカル。

— ミュージカル、舞台劇、映像はそれぞれどのように違うのでしょうか。

映像の経験はそんなに多くないですけど、本当に難しいですね。現場でやるのは原則として1日だけ。自分ではこう思って作ってきたけれど、監督はこう要望してる、共演者の人はこういう風にやってきた。それを数回の少ないリハーサルで合わせた上で、もう一段、自分がどうするかを提示できなくちゃいけない。その瞬発力というか、それは凄まじいものがあるし、

それがどう見えるかも分かっているテクニックも必要です。そして映像だと絵の力がすごく強いんで、見た目というのが圧倒的にやっぱり強い。

演劇では、例えば僕、一昨年の舞台で14歳の役をやったんですよ。映像だったら絶対あり得ないです。でも演劇って結局お客さんのイメージの中で上演されてて、演出の方法も全然違うんですよ、だから14歳という見た目の違いを想像力で越えられるんですよ。お客さんとのイメージの中で一緒に作り上げていくっていう。人が人の前で演じるから成立するメディアというか。それはすごく面白い。人が空間と時間を共有してないと作り出せない、お互いのコミュニケーションしているようなあの感じっていうのを、今だとこんな風に何となく言葉にできるんですけど、多分高校時代から感じてたんだと思います。共有とか連帯とか得も言えぬ感動があったんでしょうね。だからそこにずっと触れてたいと思って、ずっとやってるんだと思います。

— 演劇以外の仕事は事務所から打診があるのですか。

芸能界に入ったら仕事を自分で獲得していかなければいけないわけで、デビューして俳優とか舞台とかやらせてもらってたんですけど、それ以外の露出というか、テレビとかの仕事をつないでいかないと、お芝居のチャンスも、なかなか巡ってこないと思うんです。そういう意味でそのバランスをどう取るのかという自分の中の葛藤もありましたし、そういうことをつないでいったというのが現実です。

そんなことを5年くらいやってたら、急にNHKの「あさイチ」という番組から声がかかりました。NHKが何で僕にその仕事をやらせようと思ったのかは全く分からなかったんですが、求められて、それに応えるっていうのもやっぱりプロだから。でも、「あさイチ」の自分を沢山の人に認知してもらったという意味で、一つの代表作、名刺代わりの仕事みたいになってよかったと思います。「アッキー」というあだ名も付けてもらって。

—「あさいち」のようなリポーターや、他にクイズの回答者もされていますが、それが舞台や映像の仕事に役立つことはありますか。

俳優にとってプラスになると思うのは、いろんな人の人生に触れられることですよね。おいしい野菜でも工芸品でも、いいものを辿っていくと結局人に通じて行く。そこには人の努力とか技術とか思いというのがあって、そういうものが生み出されるっていうことで、やっぱりいろんな人がいて、いろんな人生があって。災害でもそうですけど、被災者って一言で言うけど、ほんとに千差万別です。だから一人一人のかけがえのなさっていうのに触れられるのは、俳優にとってはすごく大事なことだと思います。

単に怒った人を演じるっていうのは無理だと思うんですよ、具体的にその人なりの事情があって、怒ったり悲しんだり喜んだりするじゃないですか。だから、そういう意味では、一般名詞を演じることはすごく難しくって。その人固有のモチベーションの動詞、俺はこの人によく見られたいとか、怒っていることを隠したいとか、もっとすごく具体的な動詞というところまで落とし込まないといけないって思うんです。だから、リポーターとしていろんな場所に行って、いろんな人に出会った数だけ俳優として成長してなくちゃいけないと思います。

—なぜ自分に声がかかったんだろうと思う「あさいち」も、やってみたら得られるものもあったのでしょうか。

意外に向いていて(笑)。自分で言うのも変ですけど、僕は割と人懐っこいみたいで、初めて会った人に結構図々しくいろんなこと聞くんですけど、あまり嫌味にならないところが意外にロケとかでも重宝されるようで。自分のそのような才能を周りから教えてもらったというのはありますね。

—実は私も今回のインタビューのご依頼に当たって、マネージャーさんに、篠山さんは前回の撮影のときにすごく気さくに話してくださったんですよってお伝えしたんです。

前回の撮影というのは当会のドラマの撮影のことですが、その依頼があったときはいかがでしたか。何で俺なんだろうという印象はありましたか。

いやいや。何で俺なんだろうって、嬉しかったですよ。ありがたい話だと思って。弁護士を演じられるわけじゃないですか。やっぱりそれは、まぎれもなく俳優のお仕事だし、一番ありがたいですよ。

—お引き受けいただき、ありがとうございます。今回のインタビューに際して、ビデオをご覧いただいたと伺いましたが、いかがですか。

率直な感想として、自分で見るとこっぴどかしいな(笑)という感じはありましたけどね。

—そうですか。ビデオの中では弁護士会で法律相談をさせていただいたり、最後は会長になっていただいて(笑)。

そうですよね。結構、友人とかに自慢してましたよ。僕、そういう仕事したんだって。でも、あの作品、司法っていうか、この国の大事な制度じゃないですか。人が人を裁くっていうか、やっぱりそういうことをやっていくことの難しさとか危うさみたいな部分も表現されている気がして。改めて見てすごく大事なテーマだったと思いましたね。

—ありがとうございます。撮影当時のことで何か印象に残っていることはありますか。

弁護士バッジを着けさせていただいて、やっぱり責任がすごい仕事だなって。弁護士さんて、やっぱり先生って言われる職業で何となく偉い人みたいな印象があるんですが、思った以上に危ういんだなって思ったんですよ。あの撮影現場で見て、やっぱり最終的には、どの業界も結局職業倫理なんだな、と。法があって、人があるんだけど、やっぱり人がいて、でもその人が法を扱うわけで。だからこそその危うさもあるというような、そういうものを感じたことを覚えてます。



何で俺なんだろうって、嬉しかったですよ。  
 弁護士を演じられるわけじゃないですか。

篠山 輝信

—— そう言っただけだと嬉しいです。弁護士ものとか法廷ものとかの依頼はありますか。

やりたいですね。僕、検察ってすごい興味あります。裁判のこと、刑事事件だと公判っていうんでしたっけ。「HERO」(木村拓哉さん主演の検察ドラマ)を見てたんですけど、あのときの衝撃的なセリフで、日本の刑事事件で公判するかどうかは検察しか決められないというのがありました。ニュースとかで検察が不起訴にしたと聞くと、えっ、ちょっと待て、公判にかけて真実明らかにしてよ、と思うときがあります。99%有罪なんて数字は誇示せずにも負けてもいいから、もうちょっと堂々と起訴して公判で真実を明らかにするっていう気骨はないのかねって思います。制度的に間違っただけのこと言ってるのかもかもしれませんが。

—— 検察官の役がきたら、やりたいと思いますか。

やりたいと思いますよ。検察官、優秀、がんばってる、これで正義は守られた、みたいなのもいいですが、何かを逸脱していくみたいな感じの作品にも魅力を感じます。一つの警鐘も含めて、やっぱり正義って何だとか、職業倫理ってなんだってこととかも含めてそういう作品で演じたいですね。僕、朝の番組とかで割と明るい、元気な、爽やかないい人と思わ

れてるようなんで、法曹に限らなくてもゲスい役やりたいですね。女衞とかヒモとか悪い検察官とか。「あいつ、最低だな」って言われたいです(笑)。それはいい意味で、そういう役を求められているのであれば、それを演じられればいいわけで。

—— 法曹界のことに興味を持っていただいているだけでなく、ドラマ撮影のときには弁護士の倫理や正義についても理解していただいて、とても嬉しいです。東京弁護士会のノベルティグッズを差し上げた方がいいですね。

本当ですか。バッジくださいよ、バッジ(笑)。

—— バッジは無理ですが(笑)、グッズは沢山差し上げます。伝道師としてお友達に配ってください。

#### プロフィール しのやま・あきのぶ

1983年東京都生まれ。玉川大学芸術学部卒業。2006年、舞台「ANGEL GATE～春の予感」で俳優としてデビュー。以降、ドラマや映画、CM出演のみならず、テレビ番組のパーソナリティーやタレントとしても幅広く活動している。明るくさわやかな笑顔と誠実な人柄で、NHKの情報番組「あさイチ」のリポーターとしても高い人気を獲得し、Eテレの英語番組「しごとの基礎英語」ではビジネスでも使えるリアルな英語を台本なしでミニドラマに挑戦するなど、さまざまなテレビ番組で活躍中。主な出演作品は、<舞台>「チック」「寝盗られ宗介」<テレビ>NHK「あさイチ」「どーも、NHK」他。